

園児にデジタル紙芝居を上映

宮城学院女子大学

宮城学院女子大学（仙台）の教育学部教育学科幼児

教育専攻・西浦和樹教授のゼミナールに所属する学生は3月10・12日、同大附属認定こども園の3・4歳児クラスで、オリジナル制作の「デジタル紙芝居」を上映した。

これは、ソフトバンク株式会社（本社東京・港区）が提供する「社会貢献プログラム産学連携プロジェクト」によるもの。同プロジェクトは、ソフトバンク社と全国の大学などが連携し、同社が持つノウハウと大学の持つ専門性を融合させ、令和6年3月に始動した。地域が抱える諸課題の解決を目標に掲げ、無料で

参加できるのが特徴だ。

宮城学院女子大は、本件に参画する各団体の連携により活動の幅を広げ、大規模な社会貢献活動を行うという産学連携プロジェクトの理念に賛同。同大の持つ知見や専門性、リソースを活用し、同社の培ったデジタル・ICT技術との統合を図った教育プログラムの開発を試みている。

西浦ゼミの学生は、デジタル紙芝居上映のため人型ロボット「ペッパー（Pepper）」にプログラミングを行った。プログラミングでは、台詞の抑揚や体の動作などをつけることで、園児の興味を引き続けるための工夫を凝らしたと



オリジナルストーリーのデジタル紙芝居を披露



ペッパーに動きをつけ、学生が園児の関心を引く

いう。学生は、園児のテクノロジーに対する理解を促し、創造性や探究心を芽生えさせるSTEAM教育プログラムの一環で、ペッパーによるデジタル紙芝居を考案した。

紙芝居の制作に携わった一人、同専攻4年次の阿部実侑さんは「ロボットの台詞に抑揚をつける作業が大変でした。将来、ロボットが子どもたちの世話をしてくれるようになれば、先生方の仕事の負担を減らすことができるのではないかと思います」と、テクノロジーの持つ大きな可能性を口にする。

同大の幼児教育専攻では、子ども一人ひとりの発達を支援、教育や社会が抱える問題の解決に取り組むことができる資質と専門性の醸成を目指している。今回の体験は、将来学生が時代の変化に対応できる保育者や教育者となる大きな一歩となるだろう。

「Pepper」はソフトバンクロボティクスの登録商標